

歴史的ヴォルガ

— ヴォルガがロシアの川となるまで —

三 浦 清 美

1. はじめに

1.1 ヴォルガはほんとうにロシアの川か

私たちは日ごろ何の不思議もなく、ヴォルガはロシアの代表的な河川であると思っている。たしかにヴォルガ川は、エニセイ、オビ、レナ、アムールをいったシベリアの大河をのぞくと、ロシアでもっとも流域面積の広い川だし、ヨーロッパに視野を広げてもドナウをうわまわる。ロシア民謡のなかで日本でもっとも愛好されている「ステンカ・ラージン」の第8唱目、「ヴォルガ、ヴォルガ、生みの母よ、ヴォルガ、ロシアの川よ」と謳いあげる一節は、ロシアに関心のない人にもよく知られている。ヴォルガがロシアを代表する大河として捉えられることに不思議はない。

しかしながら、ここで一步立ちどまって考えてみる必要がある。歴史を紐解いてみると、ヴォルガが「ロシアの川」となったのは16世紀半ばにすぎない。ヴォルガが「ロシアの川」となったのはたかだか500年なのだ。したがって、ヴォルガがロシア語の言説世界でどう表象されてきたのかを考えると、ヴォルガはほんとうに「ロシアの川」なのかという問題は一度くぐりぬけてみる必要があるし、その価値もある。

ロシアといえばピョートル大帝の改革以後にしか関心が示されないということは、本国ロシアも含めて人文的好奇心の全般的な趨勢であろうが、本論ではこの趨勢に対してささやかな異議申し立てをおこないたい。「ロシアの川」となる以前のヴォルガ川の来歴を提示することによって、近世以降のヴォルガ表象を異化することができたら望外の幸いである。

1.2 ヴォルガ以前のヴォルガを語る文献

とはいうものの、この課題はただちに文献の制約という壁にぶちあたる。ロシア以前のヴォルガ地域について、豊富な史料が残されているという状況にはない。それでも救いがたいほど絶望的だというわけでもないのである。まず、ヴォルガ以前のヴォルガにかんする基礎的な文献を見ておくことにしよう。本論においては、政治勢力の分布からヴォルガ地域を下流域、中流域、上流域に分けたが、この区分は偶然にもこの共同研究の地域分割のしかたと一致している。この区分けには、ある種の歴史的必然性が宿っているのではないかと思う。

A. ヴォルガ下流域については、①ビザンツ・ギリシア語史料（おもにコンスタンティノス7世ポリュフィロゲネトス『帝国統治論』⁽¹⁾）、②ヘブライ語史料（おもに『ハスダイ・イブン・シャプルトとハザール王ヨセフの往復書簡』⁽²⁾）、③アラブ語史料（10世紀前半の

1 Constantine Porphyrogenitus. *De administrando imperio*. Greek text edited by GY. Moravcsik. English translation by R.J.H. Jenkins. Dumbarton Oaks, 1967. P.62-77.

2 S.A.プリエートニエヴァ『ハザール謎の帝国』（城田俊訳）新潮社、1996年、223-246頁。ヘブラ

旅行家イブン・ファドラーンの『ヴォルガ・ブルガール旅行記（報告書－リサーラー）』³⁾、10世紀後半の地理学者イブン・ハウカル、13世紀の地理学者ヤーカート⁴⁾らによって、7世紀から10世紀にかけて「ハザール帝国」が繁栄したことが知られている。ハザール帝国は、ユダヤ教を国教としていた。

B. ヴォルガ中流域については、①アラブ史料（おもにイブン・ファドラーンの『ヴォルガ・ブルガール旅行記』）、②ロシアの諸年代記によって、7世紀から16世紀までヴォルガ・ブルガール族が勢力をもっていたことがわかる。ヴォルガ・ブルガール族は、10世紀はじめにイスラーム教に改宗した。

C. ヴォルガ上流域については、ロシアの諸年代記によって、やがてロシア人となる東スラヴ人が12世紀以降に入植し、自らの活動領域としたことが知られている。東スラヴ人は、周知のとおり、9世紀中ごろにヴァイキングを支配者に迎えてキエフを中心に国家を建て、10世紀のおわりにキリスト教に改宗した。東スラヴ人はその後、騎馬民族であるポーロヴェツ人の襲撃を逃れてヴォルガ上流域に都市を建設した。やがてロシアへと発展を遂げるモスクワ国家は、このヴォルガ上流域を揺籃の地としている。

上述のように、ヴォルガ下流域にはハザール帝国、中流域にはヴォルガ・ブルガール王国、上流域には北東ルーシ諸公国というように住み分けがなされてきたが、本論では、それぞれの政治勢力の特徴と活動の様態、彼らのあいだの相関関係をおもに記述文献によって描き出そうと思う。とはいえ、この課題をほんとうに遂行するには、ギリシア語、アラビア語、ヘブライ語をはじめとする7、8カ国語を習得することが必要で、これはあきらかに筆者の能力をはるかに超える。というわけで、筆者は以下の本を精読し、筆者なりの視点から要約してみた。

まず、ハザール帝国についてであるが、ロシア（旧ソ連）のハザール研究者のS.A.プリエートニエヴァの『ハザール 謎の帝国』（城田俊訳・解説）と、同書の城田俊による解説を参照した。ヴォルガ・ブルガール王国については、家島彦一によるイブン・ファドラーンの『ヴォルガ・ブルガール旅行記』の非常に優れた翻訳、解説に拠った。北東ルーシ諸公国にかんしては筆者の専門であるが、50年以上もまえに梅田良忠によって書かれた、『ヴォルガ・ブルガール史の研究』⁵⁾ という当時としては野心的な書物を参考にした。名古屋大学出版会の『ロシア原初年代記』⁶⁾ はいうまでもなく重要な史料である。

論文のタイトルは「歴史的ヴォルガ」とし、副題を「ヴォルガがロシアの川となるまで」としているが、もうひとつの副題として「イティルからヴォルガへ」という題目も考えた。チュルク系の騎馬民族によってヴォルガは「大きな川」という意味の「イティル」という名で呼ばれていたからである。川の名前はアラビア語文献などのなかで「アティル」とも呼ば

イ語からロシア語に P.K.ココーフツォフが翻訳したもの（*Кокочов. П.К. Еврейско-хазарская переписка в X веке. JL, 1932*）を城田が日本語に重訳した。城田はほかに、イギリス人文献学者 S.シェフターによって19世紀末に発見された「無名のハザール・ユダヤ教徒のハスダイ宛書簡」（前掲書179-182頁）、シェフターのあとの引き継いだ E.N.アドラー、J.マンによって解説、上梓された「ハスダイのヘレナ皇后宛書簡」を重要なヘブライ語資料としてあげている（同192-195頁）。

3 イブン・ファドラーン『ヴォルガ・ブルガール旅行記』（家島彦一訳）平凡社東洋文庫、2009年。

4 ヤーカート、ハウカルからの引用は、すべて『ヴォルガ・ブルガール旅行記』の訳注による。

5 梅田良忠『ヴォルガ・ブルガール史の研究』弘文堂、1959年。

6 国本哲男ほか編『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会、1987年。

れ、中国でも「阿得水」として知られていた。一方、このイティルという語はヴォルガ川を意味すると同時に、ハザール帝国の首都である町を指す言葉でもあった。このあたりから話をはじめることしよう。

2. ハザール帝国（ヴォルガ下流域）

2.1 ブルガールとハザール

ハザール帝国はカスピ海北岸、ヴォルガ下流域、シルクロードの要衝に位置する交易国家だった。その繁栄ぶりは、カスピ海が「ハザールの海」という通称で呼ばれていたことから察せられる。イランでは、現代にいたるまでカスピ海という名称自体がなく、日本の面積ほどもあるこの巨大な塩湖は今でも「ハザールの海」と呼ばれている。

ハザール帝国は650年ころ建国され、965年キエフ・ルーシのアレクサンドロス大王とも呼ぶべきスヴァトスラフ公の攻撃を受けて壊滅的打撃を被り、以後再興することはなかった。8世紀中ごろからヴォルガ川河口の三角州にイティルという名の町を築き、都としたが、イティルという名前は、先述したように、チュルク語で「大きな川」を意味するから、当初はヴォルガのある方向を漠然と指し、そこにある比較的大きな町程度の含意しかなかったと考えられる。つまり、それ以前のハザールの拠点はどこか別の場所にあったということである。それはどこかといえば、コーカサスの山岳地帯であり、アゾフ海沿岸の草原地域だった。ハザールがイティルに都を築くまでの経緯を追ってみよう。それは、本論でのちに話題とするブルガール族の動きと切っても切れない関係にある。

ハザール人はもともと現在のコーカサス、ダゲスタンあたりに居住していた西トルコ系言語を話すチュルク系遊牧民で、6世紀中ごろに中央アジアに同じくチュルク系の突厥が興って大帝国を建設すると、その支配下に入り、7世紀中ごろ、西突厥の衰微にともない独立した。それより少しまえ、635年にやはり西突厥の凋落に乗じてブルガール族も独立し、クブラト・ハーンのもとでペルシア人、スラヴ人、アヴァール人に対抗しながら大ブルガリアを形成する。

ハザール族もブルガール族も人種的から言っても文化から見ても非常に近い関係にあった。10世紀アラブの著述家イブン・ルステは「ブルガールの言葉は、ハザールの言葉に似る」と証言しているが、いずれも西トルコ語系の言語を話したと考えられる。また、両者の王家は西突厥の名門家系の末裔だった。ハザールの王は西突厥の王族であった阿史那氏の血をひくと主張し、ハーカーン（可汗）を名乗り、自らを突厥帝国の継承者と位置づけていた。これに対して、ブルガールのハーン（汗）は西突厥帝国において阿史那氏と覇を競う名門家系であったドゥロ氏の後裔だったとしている。⁷⁾

ハザール帝国に先がけて成立した大ブルガリアの勢力圏は、アゾフ海岸からクリミア半島にかけての広大な領域だった。しかしながら、クブラトの死後、その5人の子らはたがいに争い、大ブルガリアは分裂する。

西進したクブラトの3人の子のうち、第3子アスパルフはドナウ川右岸下流域に王国を建設した。これがいわゆるドナウ・ブルガールで、現代のブルガリアにつながる。第4子クベ

7 『ハザール謎の帝国』、46-48頁。

ルはパンノニア（現在のハンガリー）に進んでアヴァール族に隷属し、第5子アルツィオクは神聖ローマ帝国の保護下に入った。

一方、故地にとどまった2人のクブラトの子は、大ブルガリアの分裂に乗じてアゾフ海岸に進出してきたハザールに脅かされた。第1子バトバヤンはそのまゝハザールに服属し、第2子コトラグにはいったんはハザール支配を逃れてヴォルガ川沿いに北上をつづけ、7世紀の中葉から末葉にかけてヴォルガ・カマ地域に居をさだめ、コチョ・ブルガール（白ブルガール国）を建てた。ブルガールとしてのアイデンティティを保ったのは、ドナウ・ブルガールとヴォルガ・ブルガールの二つだけだ。

いつのことなのか分明ではないが、曲折を経てヴォルガ・ブルガールはハザールに服属した。イブン・ファドラーンによれば、ブルガール王はハザール王にたいして屈辱的な従属関係にあったとされ、ブルガール王は貢税として各戸ごと一枚のクロテンの毛皮をハザール王に収めていた。⁸ また、時代を経るとハザールはさらに北方に勢力を拡大し、東スラヴ人（ヴァティチ、セヴェリヤネ、ポリヤネ）から銀貨とリスの毛皮を貢税として納めさせた。⁹ このようにハザールの北方領域への関心はおもに毛皮権益にあったから、重要な交易品であった毛皮をもとめて、ハザールはいったん北に逃げたヴォルガ・ブルガールを追い、強力な軍事力によって支配下に組み入れたと考えるほうが自然かもしれない。

アゾフ海沿岸地方に勢力を広げたハザールがいつ都市イティルに拠点を移したのかという疑問が生じるが、この問題をはっきりと解く鍵はあたえられていない。イティルの名前は8世紀中ごろから文献にあらわれる¹⁰ が、この時期は、マルワーン・イブン・ムハーンマドが率いるアラブ軍の攻撃を乗り切って、ハザールが独立大国の道を歩みはじめた時期にあっている。これらのことから、おそらくこの8世紀中頃に、ハザール人の拠点はイティルに移されたと考えられる。

対アラブ関係を配慮したことはたしかで、一定の距離をたもってアラブの攻撃を避けることができ、なおかつそれへの備えもできる場所として、ヴォルガ河口の三角州地帯はうってつけの場所だったのであろう。イティルはヴォルガ河口の三角州にあり、四方を水に囲まれているため、防衛に都合がよかったという事情があったのかもしれない。しかしながら、さらに重要なのは、イティルがヴォルガ・ドン連水陸路によって東西を結ぶシルクロードの要衝であったことである。

俗にシルクロードと呼ばれている東西交易路は複数あり、時代によって流行り廃れがあるようだが、イティルを通過するルートは、トルファン盆地から天山山脈の北を抜け、バルハシ湖、アラル海をとおってカスピ海北岸にいたる、ステップルートといわれるもので、イティルにいたればそこからはイスラーム世界にもビザンツにも西欧にも縦横に道が開けていた。イティルはまさに東西産物が集積する一大拠点だったのだ。そのうえ、カスピ海の海の幸、ミルクや肉などの畜産物、果物、ワイン、穀類を豊富に産出するきわめて豊かな地域でもあった。時代は下るが、向かうところ敵なしであったキプチャク・ハーン国もヴォルガ下流域に本営を置いた。このことから、ヴォルガ下流域の土地の豊かさは十分に推して量る

8 『ヴォルガ・ブルガール旅行記』199-200、316頁。

9 『ロシア原初年代記』、18頁。

10 『ハザール謎の帝国』、61頁。

ことができるだろう。

2.2 ハザール、ユダヤ教に改宗する

この豊かな地域の安定的に統治することがきわめて難しい課題であったことは、容易に察することができる。ハザールはつねにペルシア、ビザンツ、アラブなど強力な敵からの外圧にさらされつづけた。ハザール自らもこれらの勢力に対して積極的に戦争をしかけた。ハザール帝国が730年にブラン可汗のもとでユダヤ教に改宗したことも、この外圧によって説明がつくと思われる。キリスト教に改宗すればイスラーム教国に敵視され、イスラーム教に改宗すればキリスト教国(ビザンツ帝国)によく思われない。現にユダヤ教を受容した7年後、ウマイヤ朝アラブ軍に攻め込まれ、一時的にイスラーム教への改宗を余儀なくされている。

ハザールは当時族生した諸国家と同じように、統治の要として一神教を必要とした。この状況のなかでハザール帝国は、ユダヤ教に改宗するという前代未聞の選択をした。世界史のなかで、アニミスティック、シャーマニスティックな原始宗教から一神教としてユダヤ教を国教に選択した国家は、あとにもさきにもハザール帝国だけである。

『ハスダイ・イブン・シャプルトへのハザール王ヨセフの返書』というヘブライ語の文書があり、ユダヤ教への改宗の事情を伝えている。この文献は、19世紀末にカイロ近郊のシナゴークで発見され、イギリスのヘブライ文献学者シェフターによって世に送り出された。旧ソ連のハザール学者プリェートニエヴァは、この文献が確実にハザール自らがハザールを語ったものであると確信している。

書簡のやり取りはヴォルガを遠く離れた10世紀中ごろイベリア半島に由来する。書簡は古ヘブライ語で書かれているが、城田は前掲書においてココフツェフのロシア語訳から日本語に重訳している。重訳とはいえ、非常に貴重な仕事だ。

コルドバ王国、アブド・アッラーフマン3世の廷臣であったハスダイ・イブン・シャプルトというユダヤ教徒が、気の遠くなるほど遠いはるか東方に、ユダヤ教徒の国があるという噂を耳にし、その国主に国情を問う長い書簡を書いた。彼は当初この書簡をビザンツ帝国経由でハザール国王に届けようとするが、自領内のユダヤ教徒がハザールと接近して民族意識を高揚させることを恐れたビザンツ帝国の妨害にあって素願を果たせなかった。彼はやがて神聖ローマ帝国からの使節団のなかに2人のユダヤ人学者を見つけ、彼らにハンガリー、ルーシ、ブルガリア経由でハザールにこの書簡を届けさせることに成功する。

この丁重なる質問の手紙にたいして、ハザール可汗ヨセフが返信をしたためたのが前述の書簡である。この書簡において、ハザール王ヨセフはハザール民族の出自、ブルガール族との角逐、ユダヤ教受容のありさま、国の版図、国の豊かさ、朝貢する国々などについて述べている。ヨセフがハスダイに返書を送った10世紀中ごろは、ハザールはすでに最盛期を過ぎて斜陽に向かっており、実際の国情はここに誇らしく述べられているとはかなり異なっていたことは、プリェートニエヴァも指摘するところである。⁽¹¹⁾

興味深いのは、ハザールのハーカーンが、ユダヤ教(イスラエルの教え)、キリスト教(書簡のなかでは「エドムの教え」といわれる)、イスラーム教を競わせ、教義論争をさせていることである。「かくするうちに、王の御噂は全世界に広まった。エドムの王も、また、回

11 『ハザール謎の帝国』、129頁。

教徒の王もそれを耳にして、おのれの信仰に引き入れようと、使節をハザールの王のもとに遣わしてきた。しかし、王は賢くあらせられ、イスラエルの民からも賢人を連れてくるようにお命じになり、自らお会いになり、よく話を聞いて、広くかつ深くことの真髄をきわめられた。それがすむと、各自の信仰について真実を解き明かすよう、彼らを一堂にお集めになった。」

ブリエートニエヴァはヨセフ書簡のなかのこのエピソードを、『コンスタンティノス伝』のエピソードと同じであると比定している。⁽¹²⁾ やがてスラヴ人の使徒となるコンスタンティノス＝キュリロスもハザールを訪れ、ラビ（ユダヤ教の律法学者）、カーディー（イスラーム教の神学者）と論争し、彼らを論破した。しかしながら、コンスタンティノスの論争における勝利にもかかわらず、ハザールはなぜかキリスト教には改宗しなかった。

これらのエピソードは、ルーシのキリスト教改宗時のエピソードに似ている。キエフ大公ウラジーミルも、イスラーム教、ローマ・カトリック、ユダヤ教、ギリシア正教から改宗の誘いを受け、それぞれに調査団を派遣して、受けいれる一神教をギリシア正教とさだめた。8世紀から10世紀にかけて、ヴォルガ流域を含む広大な地域では一神教の受容がモードとなっていたのである。

2.3 二重王権と王殺し

ユダヤ教を受容していたことのほかに、ハザールについて特筆すべきは、ハザールが大ハーカーン（大可汗）という宗教的な権威と、ハーカーン・バフという世俗的な権力とによって権力を分有していたことである。日本の天皇と将軍の関係を思わせる、このハザールの二重権力構造について伝えるのは、おもにイスラーム史料である。たとえば、イブン・ファドラーンはハザールの二重権力についてつぎのように述べている。

ハーカーンなるハザール王についていえば、王はつねに臣民からは隔離された聖なる状態にあつて、4ヵ月ごとにしか人前に姿を現さないのがならわしである。一般には、かれは「大ハーカーン」と呼ばれて、彼の代理人（副王）は「ハーカーン・バフ（バフ）」と呼ばれる。そして、ハーカーン・バフこそは、軍隊を指揮・統率することや、国王の事柄（国事）を取り決めてそれを実行すること、また軍事的征服や攻撃を実際におこなう人物であり、したがって、隣接している王たちが服属しているのはハーカーン・バフにたいしてである。⁽¹³⁾

翻訳者である家島彦一は大ハーカーンを一種のシャーマン王であったと考えて、「隔離された聖なる状態」とは、「神聖な状態にある、神霊が人身に乗り移っている、聖なる状態にある、憑かれている、神の力が宿る」と考えている。⁽¹⁴⁾ イブン・ハウカルも大ハーカーンの政治上の象徴的位置づけについて、「ハーカーンは、ハザールにおいて、一切の国家行政上の指揮権をもたないが、実務上のハザール王と同じように、すべての人々は彼を崇め、

12 『ハザール謎の帝国』、128頁。

13 『ヴォルガ・ブルガール旅行記』、295頁。

14 同上、305-306頁。

彼のために跪拝を行い」⁽¹⁵⁾ と記している。神聖王大ハーカーンに神の力が宿り、ハーカーン・バフが国政を執る二重権力にかんしては、ほかにイブン・ルスタに同様の証言がある。ファドラーンから引用を進めよう。

そして、ハーカーン・バフは毎日、自らを卑下し、一身を捧げる態度を示しつつ、控えめに大ハーカーンのもとへ入っていく。そのさいにかならず、ハーカーン・バフは自分の片手に一本の薪をもちながら、大ハーカーンのいる室内にはだしのまま入る。そこで、大ハーカーンに挨拶すると、彼はその面前でもってきた薪に火をともし、それが燃えつきると、そこで王（大ハーカーン）の王座の右側に一緒にすわる。〈省略〉大王の慣行のひとつは、以下のとおりである。大王は、臣下一般の人々のために謁見することはなく、また彼らと直接会話を交わすこともなく、われわれが上述した3人（ハーカーン・バフ、クンダル・カーン、ジャーウシーギル）を除いて、ほかに誰一人として大王のいる部屋に入ることはできない。一方、王国の高位・高官たちの罷免権と任命権、懲罰権や王国の支配・管理などのすべては、大ハーカーンの代理人であるハーカーン・バフに委ねられている。〈省略〉この大王が馬に乗って外出するとき、すべての軍隊は王が外出するのに随行して馬に乗る。そのとき、王と騎馬隊とのあいだには、1アラビア・マイル（2キロ弱）の距離が置かれる。王の臣民の誰一人として、王の姿を見ることはなく、たとえあったとしてもその者は平伏して自分の顔を伏せ、王が通り過ぎるまで、けっしてその頭を上げない。⁽¹⁶⁾

大ハーカーンはまさに神聖にして犯すべからざる存在だったわけだが、ハウカルはこの点について興味深い事柄を述べている。「もしもある者が彼のもとに入る場合には、その人は彼（大ハーカーン）のために泥のなかを転げまわり、跪拝をしたのち立ち上がり、かれに着座することの許しを願うのである。」さらに、ハウカルは大ハーカーンの墓所が神聖な場所とされ、「人はその墓を通るときにはかならずや素足になり、拝礼し、そして彼の墓が見えなくなるまで騎乗することはない」と述べている。

ファドラーンからの引用をさらに進めよう。王殺しについてである。

「さらに、彼らの大王の在位期間は40年であり、王がその年数を一日たりともすぎれば、臣民と王の重臣たちはその王を殺して、『この御方様はすでに王としての理性を失われており、その認識力も混乱された』と説明する」。⁽¹⁷⁾

同様のことを、10世紀前半の地理学者イスタフリも次のように述べている。

可汗は、王より上位にある。しかし、可汗を位につけるのは、王である。位につけるのにあたって絹の小ぎれで首を絞めはじめる。まさに気を失わんとするや「君臨するは何年なりや」と問う。その者答えていわく、「...年」。もし、答えた年数よりまえに死去すれば、それはよし。もし、生きながらえるなら、定めたる年にいたるや、可汗は弑逆される。可汗は指揮権もなければ拒否権もない。しかし、崇められ、おでましになれば跪拝される。王と同等の家

15 『ヴォルガ・ブルガール旅行記』、305頁。

16 同上、295頁

17 同上、297-298頁。

柄でなければ、可汗に拝謁することは許されない。可汗位につく者は権力も財産もないが、高貴の家柄のものである。いったん可汗たらなければならなくなると、どんな事情があろうと可汗たらねばならない。⁽¹⁸⁾

さらにイブン・ハウカルも王殺しについてまったく同様の証言を残している。⁽¹⁹⁾ 神聖にして犯さざるべき王は、その霊的な力が衰えると、殺されなければならなかったのである。シャーマンの性格をもつ神聖王としての大ハーカーンとユダヤ教とがどのように同居していたのかという問題にかんしては、謎というほかない。とはいえ、民と神を結ぶ結節点としてのモーセに似た役割を、大ハーカーンが果たしていたと想定することはできるかもしれない。モーセは預言者であり、たとえば、シナイ山でひとり神に直面し、律法を受け取って民にあたえている。同じように神と民とを結ぶ機能を、私たちは大ハーカーンに見ることができるかもしれない。

このように、およそ300年間、ユダヤ教を信奉し、二重王権という独特の国政をたもってヴォルガ下流域で隆盛したハザール帝国も、965年、キエフ大公スヴャトスラフの攻撃を受けて滅びる。ハザール帝国が滅びたヴォルガ下流域は、ペチェネーグ（バジャナーク）人、ポーロヴェツ（クマン、キプチャク）人の活動の舞台となる。ヴォルガ中流域でも、ハザールが斜陽に向かう10世紀初頭、あらたな動きが生まれる。長らくその隷属化にあったヴォルガ・ブルガール族が、ハザールの宿敵であるイスラーム勢力と手を結ぼうとするのである。

3. ヴォルガ・ブルガール王国（ヴォルガ中流域）

3.1 ブルガール、イスラーム教へ改宗する

10世紀はじめ、ヴォルガ・ブルガール族がどのような生活を送っていたかは、アラブの旅行家イブン・ファドラーンの『報告書（リサーラ）』によってかなりよく知られている。

この書は、イラン北東部の中心都市マシュハドの、イマーム＝アリー・アッリダー廟付属図書館において、1922年に発見された。マシュハド写本と呼ばれるこの写本の中に収められたテキストが現存する唯一のものである。1969年に家島彦一によって『イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記』²⁰と題され、かんたんな注をつけられて翻訳された。この翻訳は2009年、同じ校訂者によって学術的価値がきわめて高い、よく整理された膨大な注釈をともなって、『ヴォルガ・ブルガール旅行記』と題されて平凡社の東洋文庫の一冊として上梓された。以下の記述はもっぱら、この『ヴォルガ・ブルガール旅行記』の翻訳、訳注、解説に拠っている。

この書は、ヴォルガ・ブルガール王アルムシュの要請によって、アッバース朝が派遣した改宗使節団が帰国後に官庁事務局（デーワーン）に提出した、公式の『報告書（リサーラ）』、あるいはその要約と考えられている。使節の往来にかんして、『ヴォルガ・ブルガール旅行記』

18 『ハザール謎の帝国』、184-185頁。

19 『ヴォルガ・ブルガール旅行記』、306-307、311-312頁。

20 『イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

冒頭につきのように書かれている。

敬虔信徒たちの指導者カリフ=ムクタディル⁽²¹⁾のもとに、サカーリバ王、イルトゥワーンの子息アルムシュ（アルムシュ・ブン・イルトゥワール）による以下のような内容の嘆願書簡が届けられると、さっそく、王によるその嘆願への返答が下された。すなわち、そのサカーリバ王の書簡は、王にイスラームの真の教え（ディーン）を説き、遵守すべきイスラームの聖法を教え、マスジド（モスク）を王のために建設し、また王の本営と王国の全土において、王のための神への祈願をおこなう説教台を設置するうえで必要な人材を派遣し、さらにまた、王に敵対する近隣の諸王から守備するための要塞の建設を乞うものであった。⁽²²⁾

サカーリバとはこの『旅行記』ではヴォルガ・ブルガールのことを指すが、イスラーム世界で一般的にスラヴ人を指す言葉であったという点が注意を要する。サカーリバはギリシア語のスクラヴェノイ sklavanoi に対応し、この語はスラヴ語のスラヴ人の自称であるスラヴェネ Славене に由来する。ギリシア語では sl- の子音結合が不可能なので、s と l のあいだに k の音をいれ、それがドイツ語（Sklave）やフランス語（esclave）と同様にアラブ語にも引き継がれたのである。

家島彦一はヴォルガ・ブルガール王アルムシュが「サカーリバ」を自称した理由を次のように考えている。サカーリバという語は、「その王国が狭義のブルガールではなく、広大なスラヴ平原を含むサカーリバ地域の一部であることをアッバース朝側に意図的に理解させるため、両国間の外交交渉の過程で用いられた特殊な言葉である」⁽²³⁾ と。ということは、ヴォルガ・ブルガール族は、アッバース朝とのあいだに生まれる自己認識の過程において、スラヴ族と自己を同一視していたわけである。すなわち、ヴォルガ・ブルガール族のイスラーム化は広大なスラヴ地域のイスラーム化の、一つの足がかりにすぎないということを、ヴォルガ・ブルガール汗アルムシュはアッバース朝に訴えていたということになる。

この冒頭の一節から明らかなおりと、アルムシュはイスラーム・ブルガール王国の建設を目指すために、イスラーム教の教育指導者（ムアッディーン）と法学者（ファキフ）の派遣を求めると同時に、「王に敵対する近隣の諸王から守備するための要塞の建設」のための資金を乞っている。この金は4000枚のムサイヤビーヤ・ディナールという膨大な金額の貨幣で、ファドラーン一行がもってゆく約束になっていたが、けっきょくアッバース朝とブルガール王国が接近することをおそれた勢力の陰謀で調達ができなかった。陰謀の首謀者はファドル・ブン・ムーサーというキリスト教徒だった。この金をめぐって、ファドラーンとアルムシュの関係はぎくしゃくすることになる。⁽²⁴⁾

「敵対する近隣の諸王」という言葉でアルムシュの念頭にあったのは、具体的にユダヤ教を奉じるハザール帝国だったと考えられる。金をめぐるファドラーンとのやりとりで、アルム

21 アッバース朝18代カリフ。贅をきわめた生活をしたが、政治の混乱を招き、最後には殺害された（『ヴォルガ・ブルガール旅行記』、30-31頁）。

22 『ヴォルガ・ブルガール旅行記』、27-28頁。

23 同上、31-33頁。

24 同上、83-84、174-176、211、214頁。

シュははっきりと、「わしを支配下に置いてきたあのユダヤ教徒からわが身を守る要塞」⁽²⁵⁾と述べている。前述したように、ブルガールはハザールにたいして屈辱的な従属関係にあった。ブルガール王は貢税として各戸ごと一枚のクロテンの毛皮をハザール王に収める義務を負っていたし、王の子息がハザール王のもとに人質となったり、皇女を側室として奪われるなど屈辱をなめていた。ユダヤ教を奉じるハザールへの隷属関係を断ち切るために、イスラームに傾斜したという政治力学も、ここには確かに存在していたと思われる。⁽²⁶⁾

3.2 イブン・ファドラーンの見た驚異の自然

ファドラーン一行は、ヒュジラ暦309年サファル月11日（西暦921年6月21日）に首都バグダードを立ち、翌年ムハッラム月12日（西暦922年5月12日）、カマ川がヴォルガ川に流れこむ河口の南側にあったブルガール王の本営（ユルト）ハッルジャに到着した。途中、ブハーラーで28日間滞在し、サーマン朝の君主に旅の安全の保障させたり、アラル海の南、フワリズム地方のジュルジャーニーヤで11月から3月までの4ヶ月間、越冬したりしている。

ファドラーン一行は、ブルガール汗とともに約3ヶ月間滞在した。牧畜を生業とするブルガール族は夏は牧草をもとめて移動するので、おそらくは王とともに天幕で移動生活を送っていたと考えられる。復路についての記述はないが、ファドラーンの言葉によれば、「夜の時間が延びて、昼が短くなってから」、すなわち、8月半ばから9月初旬にかけてブルガールの地を去り、ジュルジャーニーヤないしはブハーラーで越冬して、同じ道程をたどってバクダードに帰還したと考えられる。報告書が残っていることから、バグダードに無事に到着したことはたしかだろう。⁽²⁷⁾

バグダード出身のファドラーンにとって、北方は驚異・驚嘆の世界だったが、旅の道中、滞在中のさまざまな事件、いろいろな事物、自然環境、動物相、植物相の違い、王だけではなく一般庶民の生活習俗の違いなどを鋭い観察眼でくわしく記録している。ことに印象的だったのは、ジュルジャーニーヤですごした冬の厳しい、オーロラ、夏の長い昼と短い夜だったようだ。

冬の寒さについては、ファドラーンは次のように語っている。

われわれは幾日もわたって、ジュルジャーニーヤに滞在した。そのとき、ジャイフーン川は端から端まで全面凍結して、川の氷の厚さは17シプル⁽²⁸⁾に達した。そして馬、ラバ、ロバや荷車は、まるで道路の上を通過するように、その氷上を通っていた。しかもその氷はがっしりした状態で動かずに、3ヶ月間、そのままの状態になっていた。われわれは、まさに苦しい苦しい生き地獄のような厳寒の扉がわれわれに向かって開かれているとしか思えない地方を見た。その地方では、雪が降るときにはかならず激しい暴風をともなった。⁽²⁹⁾

オーロラ（赤気、低緯度オーロラ）について非常な驚きをもって記されている。

25 『ヴォルガ・ブルガール旅行記』、175頁。

26 同上、212頁。

27 同上、322-333頁。

28 同上、102頁。1シプルは23センチで、17シプルは3メートル91センチ。誇張であろう。

29 同上、62頁。

私は、太陽が沈むまえの礼拝の基準時刻に空のかなたを眺めていた。そのとき、すでに空は真紅に染まっていたが、私は空中に猛烈な声と甲高いうめき声を聞いた。そこで、私が頭を上げると、まさにそのとき、火のような赤い雲が私のまじかのところであって、そのうめき声と音響は、そこから出ていた。しかも、その雲のなかに人間と馬に似たものがあり、さらに雲のなかにある人間らしきおぼろげなかたちの手には、私がまさしくはつきりと識別し、その像をくつきりと描くことのできるような槍と刀があった。…われわれはそのことに驚愕し、ただひたすら神への懇願と祈願をおこなった。…われわれは、雲の一群が別の一群を攻撃し、一瞬にして両者が一緒に交じり合い、その後、分解する様子を眺めていた。しかも、そのことは夜の一時の間も、同じようにつづいてからふたつの群れは消滅した。⁽³⁰⁾

ファドラーンは、夏の昼の長さや夜の短さのため、礼拝の時間に支障が生じることを指摘している。王の仕立て師となっているバグダード出身の男とファドラーンは次のような会話を交わす。

私は「では、最後の夜の礼拝（イシャー）については」と訊いた。彼は「私たちは、それを日没の礼拝（マグリブ）と一緒にこなすのです」と答えた。「では、夜の礼拝はどうしたのか」と、私は訊いた。彼は「あなたをご覧になったとおり、夜はすでに長くなりはじめたといっても、以前にはこれより短かったのです」と彼は言って、さらに次のように説明した。彼は、一ヶ月以来、翌朝の礼拝をやりそこなわないかと心配で眠れなかったこと、つまり、この地方の人は日没の礼拝のときに料理鍋を火にかけて、それから翌朝の礼拝をするのであるが、その礼拝が終わったときでも、火にかけた料理はまだ煮えないほど短い時間であるという。⁽³¹⁾

3.3 ファドラーンの人間観察 — 巧まざるユーモア —

ファドラーンの行き届いた観察眼は自然現象にたいしてだけではない。人間にたいするそれもじゅうぶんに鋭く、それがときには巧まざるユーモアを醸しだすことがある。

これはヴォルガ流域ではないが、ジュルジャーニーヤからハッルジャにいたる途中で出会ったトルコ系グズ人についてつぎのように語っている。

トルコ人たちはすべて口髭だけを残して、顎鬚を引き抜いてしますが習わしである。あるとき、私は彼らのなかの一人のよぼよぼの老人に出会った。そのとき彼は顎鬚を引き抜いていたが、顎のしたに多少の鬚を残していた。しかも、彼は山羊の外套を着ていたので、人が彼を遠くからみれば、まさしく山羊だと間違えてしまうほどであった。⁽³²⁾

同じくトルコ系パーシュギルド人の男について次のように書いている。

30 『ヴォルガ・ブルガール旅行記』、179-180、218頁。

31 同上、181頁。

32 同上、124頁。

ところで、彼らは鬚を剃っており、虱を食べ、彼らの一人は自分のクルタクの縫い目を探し回り、虱を見つけると、自分の歯でかみ殺す。すでにイスラーム教に改宗していた彼らの一人がわれわれに同行して、いつもわれわれの世話をしてくれた。あるとき、彼が自分の衣服のなかに虱がいるのを見つけると、それを自分の爪で潰してから、ぺろぺろとなめているのを、私は見た。そして、彼は私を見ると、「うまい！」と言った。⁽³³⁾

そして、要塞建設の資金についてアルムシュから問いただされたとき、つぎのように書いている。窮地に陥ったとき、こんなことまで観察できるというのは、なかなかの胆力である。

(アルムシュは)「さあ、その金を出せ！そのことが汝の身のためだぞ」と言った。その言葉を聞いて、恐怖に襲われ、がっかりして、私は王のまえから引き下がった。ところで、王は立派な風貌と体格で、でっぷりと太り、横幅のある身体であったので、その声はまるで酒樽の底からしゃべっているようであった。⁽³⁴⁾

このようなエピソードを拾いあげると興味はつきないが、最後にロシア語でメドブーハと呼ばれる蜜蜂酒をめぐるエピソードの一つ引いておこう。お酒をたしなむイスラーム教徒には、なかなかお目にかかれないであろう。

われわれが食べ終わると、王は蜂蜜酒 — 彼らはそれを「スジュー」と呼び、一昼夜醸すことで造ったもの — をもってこさせた。彼は一杯飲んでから起立すると、「これぞわが主君、敬虔信徒たちの指導者カリフへのわが喜びなり。アッラーよ、彼の存命をいっそう永からしめたまえ！」と言った。⁽³⁵⁾

何かロシア人とともに囲む食卓を思い起こさせる光景だが、家島彦一はファドラーンはスジューを飲むことをハラーム（禁止行為）とみなしておらず、おそらく彼自身も王とともにスジューを飲んだと思われると注釈している。ハナフィー派の法学解釈では、ナビーズ（発酵酒）は「許されるもの（ハラール）」とされたのである。当時のブルガール王国はハナフィー派法学にしたがっていたので、ナビーズはハラームとされていなかった。⁽³⁶⁾

蜂蜜酒はあきらかに森林産物だから、草原の民ブルガールの支配下に、森林に暮らす東スラヴ人が組み込まれていたのかもしれない。次節では、東スラヴ人がどのようにハザル人やブルガール人と交渉をもったかについて見てみることにしよう。その最初期にあたるキエフ・ルーシにおいては、あまりヴォルガが登場しないことをあらかじめ断っておきたい。

33 『ヴォルガ・ブルガール旅行記』同上、132頁。

34 同上、176頁。

35 同上、172-173頁。

36 同上、207頁。

4. ウラジーミル大公国（ヴォルガ上流域）

4.1 ハザール帝国崩壊まで

ここまでで、西突厥から分離して大ブルガリアが形成され、大ブルガリア崩壊後にハザールが分裂したブルガール諸族を呑みこんだ経緯を見てきた。ロシアの諸年代記、なかでもその成立が最も古いと考えられる『過ぎし年月の物語り *Повесть временных лет*』は、この経緯のあとの時代について証言している。『過ぎし年月の物語』はルーシ（ロシアの古名）の歴史を旧約聖書『創世記』の昔にさかのぼって、いわゆる編年体で事件を語ってゆくものだが、『創世記』の諸エピソードの語りが終わったあと、年代確定以前の箇所にもブルガール族について次のような記述がある。

スロヴェネの民族がドナウのほとりに住んでいたとき、スキタイ、すなわち、ハザールからボルガリといわれている者がやってきて、ドナウに沿って住んだ。彼らはスロヴェネの征服者であった。⁽³⁷⁾

ハザール支配を逃れてクプラトの第3子アスパルフがドナウ・ブルガール国を建て、それがブルガリア国家の起源になったことはすでに私たちが見てきたところだ。ロシア人の祖である東スラヴ人は彼征服民族だった。『過ぎし年月の物語』859年の項には、北寄りの東スラヴ人がヴァイキングに貢税を納め、南の東スラヴ人がハザールに貢税を納めていたことが証言されている。

海の向こうのヴァリヤギがチュジとスロヴェネ、メリヤとすべてのクリヴィチに貢物を課した。また、ハザールはポリャネやセヴェルやヴァチチに貢物を貸し、一戸より銀貨とリスの毛皮を取り立てた。⁽³⁸⁾

9世紀中ごろのハザールはきわめて強力な国家であり、ブルガール人ばかりではなく、東スラヴ人も支配下においていた。このハザールのくびきを脱するために、ヴォルガ・ブルガール人はイスラーム教に改宗し、東スラヴ人はヴァイキングの首領リュリクを招聘して最初のロシア国家をつくった。東スラヴ人がこうした隷属状態にあったが、やがてハザールを滅ぼすことを暗示するエピソードが『過ぎし年月の物語』にある。興味深いので引用しよう。

ハザールは「われわれに貢物を支払え」と言った。ポリャネ（キエフに居住している東スラヴ人）が相談して一戸から一本の剣を差し出したので、ハザールはそれを自分たちの公と自分たちの長老のもとに運び、彼らに「このとおりわれわれは新しい貢物を見つけました」と言った。彼らは彼らに「どこから」と言った。彼らは「山のうえの森のなか、ドネプルのほとりで」と言った。彼らが「何を人々は差し出したのか」と言ったので、彼らは剣を差し出した。ハザールの長老たちは「よくない貢物です、公よ、私たちは鋭い片刃の武器、すなわちサーベルによ

37 『ロシア原初年代記』、10-11頁。

38 同上、18頁。

って自分たちのために貢物を得ました。ところが、これらの者の武器は両側が鋭い剣です。これらの者は私たちとほかの国々にたいして貢物を課すでしょう」と言った。⁽³⁹⁾

この記事は、『過ぎし年月の物語』の年代確定以前にある。リューリクによる国家建設の以前から、東スラヴ人に尚武の気質があったことが語られていて興味が惹かれる。

さて、ご存知のように、東スラヴ人は「私たちの土地は大きくて豊かですが、秩序がありません。ぜひ来て私たちに統治してください」と頼みこみ、リューリクを指導者に担ぎあげて統一国家をつくった。この統一国家が、南方面の東スラヴ人にハザールへ朝貢することを禁じたことが、『過ぎし年月の物語』に何回か記されている。885年の項から引用しよう。

オレーグがラジミチに使者を送って、「おまえたちは誰に貢税を納めているのか」と言った。彼らは「ハザールに」と言った。オレーグは彼らに「ハザールには納めないで私に納めよ」と言った。そこで彼らはハザールに納めていたように1シチリャグ⁽⁴⁰⁾ずつオレーグに納めた。⁽⁴¹⁾

このあたりの時代は、まだルーシの支配者にヴァイキングの性格が残っているのだが、オレーグの次の支配者であるスヴァトスラフの代に、キエフ大公国の軍隊は一気に様変わりする。船から馬に乗り換えるのである。この時代の急激な転換を、『過ぎし年月の物語』の964年の項は次のように伝えている。

スヴァトスラフ公は一人前になり青年に達したので、多くの勇敢な軍勢を集め始め、豹のように身軽に行動し、多くの戦争を行った。彼は自分の軍の後ろに輜重（しちょう）車を伴わず、大鍋も持たず、肉も煮ず、馬肉であれ獣の肉であれあるいは牛肉であれ、細かく刻んで炭の上で焼いて食べるのが常であり、天幕も持たずに鞍褥を広げ、鞍を枕にしていた。ほかの彼の軍勢も同様だった。⁽⁴²⁾

かのアレクサンドロス大王にも比すべきキエフ・ルーシの英雄スヴァトスラフは、馬を駆っておよそ300年間ヴォルガ下流域に君臨しつづけたハザール帝国を崩壊に追いこんだ。『過ぎし年月の物語』965年の項は次のように語っている。

スヴァトスラフはハザールに向かって兵を進めた、一方、ハザールはこれを聞き、自分の公カガンとともに迎え撃とうと出撃し、両軍が戦いはじめた。そして、戦いの結果、スヴァトスラフがハザールに勝ち、彼らの町ベラ・ヴェジャ⁽⁴³⁾を占領した。⁽⁴⁴⁾

39 『ロシア原初年代記』、15-16頁。

40 貨幣の単位。シリングと同じ。フランク族とスラヴ族の交易が盛んだった8世紀頃までに西ゲルマン語から借用されたものと推定されている。

41 『ロシア原初年代記』、25頁。

42 同上、74頁。

43 白いヴェジャ。サルケルのこと。ハザール汗国の要塞でドン河畔、現在のツィムリャンスクの近くにある。

10世紀にはいると、さしものハザール帝国も急激に力を落とした。ヴォルガ・ブルガール人がアラブ人と手を結ぶのを許したことからそれを察することができるのだが、崩壊はほんとうにあっけなくやってきた。『過ぎし年月の物語』にもこれ以降、ハザールについての記録はほとんどなくなる。それにかわってプレゼンスを増すのがヴォルガ・ブルガール人だ。

4.2 ヴォルガ・ブルガール人の登場

『過ぎし年月の物語』においてヴォルガ・ブルガール人の存在感が増すのは、ハザール帝国崩壊以後だが、生活レベルは東スラヴ人よりもずっと高かったようだ。たとえば、『過ぎし年月の物語』985年の項には、次のように書かれている。

ウラジーミルは自分のおじドブリニャとともに船に乗り、ボルガリに向かって兵をすすめ、また馬で岸をすすむトルコ人を率いてボルガリを打ち負かした。ドブリニャはウラジーミルに「捕虜を見ると、すべて長靴をはいています。私たちはこの者たちに貢税を納めさせることができません。わらじをはいているものたちを探しに行こうではありませんか」と言った。そこで、ウラジーミルはボルガリと和を結び、たがいに誓いを立てた。ボルガリは「石が浮かびはじめ、ホップが沈みはじめるなら、私たちのあいだに平和はなくなるでしょう」と言った。そして、ウラジーミルはキエフに帰ってきた。⁽⁴⁵⁾

東スラヴ人はスヴァトスラフの時代に拡張した支配領域を統合するために、一神教への改宗を求めるようになる。そのさい、キエフ大公ウラジーミルが、ユダヤ教徒であるハザール人、イスラーム教徒であるヴォルガ・ブルガール人、ローマ・カトリック、ギリシア正教から改宗の誘いを受け、調査団を派遣して、結局、宗教儀式の美しさに惹かれてギリシア正教を受け入れることに決めたのは有名なエピソードである。ドニエプル川が主な河川であった『過ぎし年月の物語』のなかで、ヴォルガ川の存在が暗示される唯一の箇所といってもよいかもしれない。

マホメットを信仰するブルガール人が来て、「あなたは賢明で思慮深い公ですが、掟を知りません。私たちの掟を信じ、マホメットを礼拝しなさい」と言った。ウラジーミルは「おまえたちの信仰はどのようなものか」と言った。彼らは「私たちは神を信仰しています。また、マホメットは私たちに教えて「割礼をしなさい。そして豚肉を食べず、酒を飲んではなりません。その代わりに死後には女たちと淫行することができます」と言っている。ウラジーミルは自らも女たちとの多くの淫行を好んでいたもので、楽しげに聞き入っていた。しかし、割礼と豚肉を食べないこと、まったく飲酒しないことは彼の気に入らなかった。彼は「ルーシ人には飲むことが楽しみなのだ。私たちはそれなしには生きている甲斐がない」と言った。⁽⁴⁶⁾

つづいてユダヤ教徒であるハザール人がやってくる。

44 『ロシア原初年代記』、74-75頁。

45 同上、98-99頁。

46 同上、99頁。

これを知り、ハザールのユダヤ教の者たちが来て、「私たちはボルガリとキリスト教徒が来て、あなたにそれぞれの自分の信仰を教えたと言いました。キリスト教と私たちはあなたが礎にした者を信仰しています。ところが、私たちはアブラハム、イサク、ヤコブの唯一の神を信仰しているのです」と言った。⁽⁴⁷⁾

しかしながら、ユダヤ人が離散し、ハザール帝国も滅びてしまったことにユダヤ教の弱さを見てとり、ウラジーミルはユダヤ教を斥けた。⁽⁴⁸⁾

こうしたキリスト教改宗時のエピソードからも、キエフ・ルーシの時代にはヴォルガがあまりに「ロシアの川」ではなかったことがわかる。この状況が一変するのが12世紀前半である。東スラヴ人は騎馬民族からの攻撃を避け、草原地帯のキエフからヴォルガ川上流域の森林地帯へと退き、ヴォルガ上流域は東スラヴ人の手で開拓される。

4.3 ヴォルガ上流域の開拓

ハザール帝国の解体後、ヴォルガ下流域が誰によってどのように支配されたのかはあまりよくわからない。しかしながら、『過ぎし年月の物語』は、ルーシを悩ませる南方の騎馬民族として、ペチェネグ人とポーロヴェツ人の名を伝えている。ペチェネグ人が年代記にあらわれるのは11世紀前半までで、それ以降はポーロヴェツ人（クマン族、キプチャク族）に替わる。ポーロヴェツはスラヴ語のポーレ поле（草原）に由来し、草原の民というほどの意味合いだが、彼らが居住していた場所、キプチャク草原の名称からキプチャク族とも呼ばれるので、ヴォルガ下流域はポーロヴェツ人に押さえられていたと考えてよいようである。

ポーロヴェツ人はキエフ・ルーシにきびしい攻撃を加えた。キエフは荒廃し、それを嫌った東スラヴ人の指導者たちは、北方の森のなかに逃げ込み、都市を建設する。いわゆる黄金の環として有名な諸都市がそれで、その中心はロストフ、スーズダリ、ウラジーミル、トヴェーリ、モスクワと変遷した。北東ルーシとも呼ばれるこの森林地帯が、ヴォルガ上流とその支流オカ川にはさまれた一帯にほかならない。14世紀以降、ここからモスクワが生まれ、ロシアへと発展することからもわかるとおり、ヴォルガ上流域はロシア史の発展にきわめて重要な役割を果たした。

最初に北東ルーシの開拓がさかんになったのは12世紀前半で、ウラジーミル・モノマフの息子、ユーリイ・ドルゴルーキイがその立役者だった。19世紀末のロシア中世史家プレスニャコフは、ユーリイ・ドルゴルーキイを沿ヴォルガのコロンブスと呼んだ。モスクワの建都は1147年とされるが、それはその年、年代記にはじめてモスクワの名前があらわれる⁽⁴⁹⁾からである。モスクワはユーリイ公の領地で、そこに北東ルーシ諸公が集まって会食をしたと記されている。モスクワの中心トヴェーリ大通りに面してユーリイ公の大きな騎馬像が建てられている。ユーリイ公はモスクワの建設者として顕彰されているのである。

こうして、北東方面に移ったルーシ諸公の主たる敵となったのが、ヴォルガを下ったところに居住するイスラーム教とのヴォルガ・ブルガール人だった。『過ぎし年月の物語』1088

47 『ロシア原初年代記』、100頁。

48 同上、99-100頁。

49 Полное собрание русских летописей(далее ПСРЛ) Т.9.С.172.

年の項で、ヴォルガ・ブルガール人がムーロムを占領したことが報じられている⁽⁵⁰⁾が、ブルガール人による攻撃についての記事はこれしかなく、ポーロヴェツ人にたいしてはつねに守勢に立たされたルーシ諸公にとって、ヴォルガ・ブルガール人はどうやら組みしやすい相手だったように思われる。『ニコン年代記』1120年の項は、ユーリイ・ドルゴルーキイ公のブルガール遠征にふれ、次のように述べている。

ヤロスラフはポーロヴェツ人と戦うためにドン川方面に出陣したが、彼らを見つけることができずに引き返した。一方、彼の弟、ユーリイ公はブルガール人へ遠征したが、多くの捕虜を捕らえ、彼らの軍勢を打ち破った。⁽⁵¹⁾

ヴォルガ・ブルガール人との戦いは、その子アンドレイ・ボゴリュプスキイ公に引き継がれておこなわれる。アンドレイ公は北東ルーシの中心をウラジーミルにさだめ、ウスペンスキイ大聖堂、ドミートリエフ聖堂、ポクロフ・ナ・ネルリ聖堂、ボゴリュボヴォ宮殿などをつぎつぎに建立し、キリスト教をさかんにすることでウラジーミルを中心とする国土の再統一をはかった。そうしたアンドレイ公にとって、イスラーム教徒であるヴォルガ・ブルガール族は格好の敵だった。『ニコン年代記』1160年の項は、アンドレイ公によるヴォルガ・ブルガール族遠征をつぎのように記している。

この年、アンドレイ・ユーリエヴィチ、ドルゴルーキイ公の息子は、自らの息子イジャスラフ、ムーロム公ユーリイとともに、ヴォルガ・カマのブルガール人に出征した。主なる神といと清らなる聖母は彼らを助け、イシュマエルの末裔たち（イスラーム教徒）を打ち殺した。彼らの公は少数の従士たちを連れてかろうじて逃げ出した。彼らは行って、カマ河畔の栄えあるブリャヒモフの町をも占領し、ほかの町々を焼いた。これらはいと清らなる聖母の第2の奇跡であった。このイコンは僧衣を身にまとった二人の司祭が運んできたものであった。このように僧衣を身にまとった司祭たちと、同じように祭衣を身にまとった輔祭たちが、生をみだす十字架を運んだものであった。このいと清らなるイコンはツァリグラドからキエフの大公ユーリイ・ドルゴルーキイ公にもたらされたもので、それを敬虔なるアンドレイ公が自らの父キエフ大公ユーリイ・ドルゴルーキイ公のもともからもってきて、金屋根のウラジーミルの自らの教会に据えたのであった。⁽⁵²⁾

『ラヴレンチイ年代記』には、ほぼ同じ内容の記事が1164年にある⁽⁵³⁾が、両者は同一の事件を語ったものと思われる。いずれも、聖母の奇跡による勝利であったことが強調されている。ここには、あきらかにキリスト教対イスラーム教の対立の構図がある。

しかしながら、ヴォルガ・ブルガール族遠征がいつも成功裏におわったわけではない。見通しが甘ければ、手痛い失敗を喫することもあった。『ニコン年代記』1172年の項では、つ

50 『ロシア原初年代記』、230頁。

51 ПСРЛ Т.9. С.151.

52 Там же. С.230.

53 ПСРЛ Т.1. Стл.352-353.

ぎのように述べられている。

この冬、大公アンドレイ・ユーリエヴィチ・ボゴリュプスキイ、ドルゴルーキイ公の息子は自らの息子ムスチスラフ公を、ヴォルガ・カマのブルガール族を討つために派兵した。リャザン公は自らの息子を派遣し、ムーロム公は自らの息子を派遣した。ヴォルガ・カマのブルガール族と冬に交戦するのは不利であったが、彼らには遠征がどうしても必要だったのである。愚か者たちはこのようなことをし、わが身に悲しみをもたらした。多くの者たちが行軍中涙にくれ、行軍中、足が進まなかった。⁽⁵⁴⁾

ヴォルガ・ブルガール族と冬に戦うのが不利なのは、より北に位置するルーシ側が食糧等の物資が冬に欠乏したと考えられることと、ブルガール族は集団をつくって冬営している（夏は放牧のために散住している）ために容易に応戦ができたことによるのだろう。このような状況にもかかわらず、アンドレイ公はブルガール遠征を強行し、あやうく失敗するところだった。

ムスチスラフ公はゴロデツにいたが、自分の従兄弟にあたるリャザン公とムーロム公と（ヴォルガ川と）オカ川の河口で待ち合わせ、2週間そこに滞在し、軍司令官ボリス・ジディスラヴィチと合流した。そこで準備万端調えた。そして、ブルガールの地に向けて出発した。彼らは悟られることなく敵のもとに到着し、6つの村、7つの都市を占領し、多くの男たちを斬り殺し、子どもと子供たちを捕虜にし、帰還した。彼らを追って、7000のブルガール人たちが追ってきたが、もう少しのところで追いつかなかった。その距離はたった20露里だった。ムスチスラフ公はそのとき少数の兵士か引き連れていなかった。すべての隊が窮乏のために先に進軍してしまっており、また残りの者も冬の窮乏のために痩せ細っていたからである。しかしながら、主なる神といと清らかなる聖母は、いわく言いがたい妙なる奇跡をお示しになり、敵を引き返させたもうた。目に見えるようにはっきりとお守りくださり、異教徒を河口から追い払ってくださったのである。ルーシの軍勢は、冬にブルガール人と戦うのは不利なため、大いなる窮乏によりやっとのことで戻ってきたのである。⁽⁵⁵⁾

こうした無理がやがて配下の貴族たちの反感を招き、アンドレイ公は暗殺される（1174年）。⁽⁵⁶⁾ 建設事業や遠征を強気で押しきったアンドレイ・ボゴリュプスキイ公の企図は、早すぎた中央集権化の試みだったといえるだろう。ちなみに、アンドレイ公の暗殺を背後で操ったのは、ヴォルガ・ブルガール族出身であったアンドレイ公の妻だった。『トヴェーリ年代記』では、次のように書かれている。

この年、6月29日土曜日の夜半、聖なる使徒ペテロとパウロの祝日、敬虔なる大公アンドレ

54 ПСРЛ.Т.9. С.247.

55 Там же. С.247.

56 殺害の経緯は『イパーチイ年代記』に詳しく記されている。拙訳で邦訳がある。「中世ロシア文学図書館」『電気通信大学紀要』24巻、93-98頁。

イ・ユーリエヴィチ・ボゴリュプスキイ公が、自らの公妃の教唆で、配下の大貴族、クチコフ家の者たちの手によって殺された。公妃はブルガールの生まれで、かねてからアンドレイ公にたいして悪心を抱いていた。たった一つのことが原因だったわけではなく、大公がブルガールの地を何度も攻略し、自らの息子を派遣し、ブルガール人に多大な害をなしたことをひたすら恨みに思っていたのである。⁽⁵⁷⁾

アンドレイ公の母、ユーリイ・ドルゴルーキイ公の妻は、ポーロヴェツ人のハーン、アエパの娘だった。アンドレイ公の妻はブルガール族の出身である。ルーシ、ポーロヴェツ、ブルガールは敵意と提携の複雑な依存関係を形成していた。ここにポーロヴェツ人とヴォルガ・ブルガール族の関係を暗示する衝撃的なエピソードがある。ロシアの『イパーチイ年代記』1117年の項で、次のようなエピソードが伝えられている。

そのときポーロヴェツ人がブルガール人のところに来た。ブルガールの公は彼らに毒の入った酒を飲ませた。アエパ⁽⁵⁸⁾もほかの公たちもこれを飲んだが、みんな死んだ。⁽⁵⁹⁾

ヴォルガ流域に居住する北東ルーシ諸公、ポーロヴェツ人、ヴォルガ・ブルガール人はたがいに争いあったわけだが、同時に血縁関係も濃密に張りめぐらされ、一筋縄ではいかない、だまされまされる間柄にあったことがわかる。そうしたなかで、やがて後発のルーシ諸公が台頭してくる。

4.4 北東ルーシ諸公の台頭－12世紀後半

アンドレイ・ボゴリュプスキイ公の死のあとも、北東ルーシ諸公のヴォルガ・ブルガール人にたいする攻撃はつづいた。それはある種、宗教戦争の性格をもっていたことは強調しておいてもよいかもしれない。『イパーチイ年代記』は1182年の項⁽⁶⁰⁾に、『ニコン年代記』1184年の項⁽⁶¹⁾に報じているが、同じ事件だったと思われる。ここでは、『イパーチイ年代記』から引用する。若い公の戦死という尊い代償を払って、ブルガール勢にたいして勝利を収めたことが記されている。

この年、スーズダリ公フセヴォロド・ユーリエヴィチはブルガール人とも戦いをはじめた。フセヴォロドはスヴァトスラフ公に支援を求めて遣いを送り、スヴァトスラフ公は彼のもとに息子のウラジーミルを送って彼にこう言った。「私たちの時代、私たちのために、神は兄と息子が異教徒への戦いをしかけるようになさってください。」彼らはヴォルガ川沿いにブルガールに向かっていった。彼らはイサドゥイと呼ばれる島のある場所にむかって出発し、ツェ

57 ПСРЛ Т.15. С.250-251.

58 梅田の解釈と異なる。А.Карпов. Юрий Долгорукий. М., 2007, С.42.). ちなみに、アエパの娘はウラジーミル・モノマフの子ユーリイ・ドルゴルーキイに嫁いだ。ユーリイはモスクワを建てる(1147年)。

59 ПСРЛ Т.2. Стл.285.

60 Там же. Стл.625-626.

61 ПСРЛ Т.10. С.9-10.

フク川の河口で上陸し、すべての平底船とガレー船を乗り捨てた。ペロオゼロの部隊は、彼らのもとに軍司令官フォマ・ナザコヴィチともう一人の軍司令官ドロジャイを残した。というのは、彼は父の部下だったからである。ほかの軍司令官たちと公たちは、それぞれ自分の部下からだれかを残し、自分たちは馬に乗ってブルガールの地、銀ブルガールの「大いなる町」に向けて出発した。ブルガール人はルーシの軍勢が多数であるのを見てとり、打って出ることができず、町にたてこもった。より若い公たちがはやり、門に向かって突進した。そこで、フセヴォロドの甥、イジャスラフ・グレボヴィチが矢傷に倒れた。彼は陣屋に運ばれたが、まだ息があった。フセヴォロドには大いなる悲しみがあり、すべての公、従士たちに厭戦気分がただよった。近隣のブルガールの町々、ソベクリャネ、チェルマタは、招集がかかったほかのブルガール人と合流した。テムチュジが5千の平底船にのって彼らに合流した。トリツィコキイから馬に乗ってルーシの船に向かった。かの島に上陸し、ルーシに出発した。ルーシは軍勢をととのえた。神のお助けにより気を取り直してブルガール人に立ち向かった。彼らは先遣隊に合流したが、それを見たブルガール人たちは逃走をはじめ、わが軍がこれを追った。彼らは異教徒たちを斬り殺した。マホメット教徒たちはヴォルガまで逃げおおせ、船に飛び込んだ。船はたちまち方角を変えて逃げ去った。このようにして彼らの千人以上の者たちが溺れ死んだ。神がルーシを助けたまい、ルーシ人は彼らに勝った。2500人を斬り殺したが、残りは船に飛びこんだ。漕ぎ手たちは起こった事件を知らず、彼らのところに落ちのびたブルガール軍をさんざんに打ち破って、この島と彼らの平底船で起こったことについて神をたたえた。イジャスラフ・グレボヴィチは矢傷がもとで亡くなった。彼らは彼の遺骸を隠して船に載せ、自らとともに運び、ウラジーミルの金屋根の聖母教会に葬った。

4.5 北東ルーシ諸公の勝利－13世紀前半

『ヴォスクレセンスカヤ年代記』1219年、1220年の項は、北東ルーシ諸公がヴォルガ・ブルガール族を圧倒したことを伝えている。

1219年 ブルガール人たちがウスチュグに来襲し、甘言を弄してこれを占領し、そのあと、ウンジ向かった。ウンジの人々は彼らを打ち返した。

1220年 ユーリイ・フセヴォロドヴィチは、自らの弟スヴァトスラフを神を知らぬブルガール人への遠征に送り出した。彼とともに公は自らの軍隊を派遣し、指揮をエレミイ・グレボヴィチに命じた。彼らはヴォルガ川の、オカ川の河口で合流し、そこから平底船と舟で下流に出発した。オシリャ川の対岸のイサドゥイにいたると、上陸した。スヴァトスラフは自らの軍隊に戦闘体制をとらせた。ブルガール人は自らの公とともに馬上で彼らを見つけて、野原に舞台を展開させた。スヴァトスラフはただちに彼らに向かったが、彼らは少しその場に留まり、わが舞台に向けて矢を放ったが、不安にかられ町に逃げこんだ。彼らは町に逃げこむと、町に立てこもった。スヴァトスラフ公はただちに町に進軍した。町の近辺には櫓でできた堅固の囲いのある要塞があった。その囲いの向こうに二重の壁があり、壁と壁のあいだには土塁を築き、この土塁に沿って堀をうがっていた。スヴァトスラフ公は町に来ると、人々はまえもって火と斧で武装し、その後ろに射手と槍兵がひかえていた。彼らは城壁に取りつ

くと、非常に激しい斬り合いとなった。囲みが切り刻まれ、壁が壊されて、それらに火がかけられた。ブルガール人は町のなかに逃げこんだ。これらの者たちは彼らを斬り捨てながら、町まで進んだ。そのあと、あちらこちらから町に攻めかかり、それを焼いた。黒々とした煙があがって、風に乗ってスヴァトスラフの軍勢を取り囲み、スヴァトスラフの軍勢のなかで人間の姿が見えなくなった。彼らは煙と悪臭に耐えきれず、そのうえ水もなくなったので町から退却した。スヴァトスラフは言った。「風下から町の反対側に移ろう。」彼らは立ち上がって町の反対側に行き、そこに到着すると、町の城門に攻撃をしかけはじめた。公はかれらに言った。「兄弟たちよ、従士たちよ。今日、私たちには二つのことが待ち受けている。良いことか、はたまた、悪いことか、いずれかである。はやくことに取りかかろう。」公自身がみな先頭に立ち町に向かって駆けだしていった。すべてに兵士たちは彼を見て先を争って町に向かった。木組みの囲いをと城壁を反対側からも破り、火をつけると、ブルガール人たちは町に逃げこんだ。この者たちは彼らを追い、斬り伏せたあと、町のいたるところに火をつけた。すると、炎はあらゆる場所から町をつつんだ。ひどい暴風が起こり、見るも恐ろしい光景が繰りひろげられた。町からは非常に大きな叫び声が上がった。ブルガールの公は別の門から出て、小数の供の者とともに馬で逃げ去った。歩兵たちが逃げ出してきた。わが軍は男たちを殺し、女子供を捕虜にした。町のなかで焼け死んだ者たちもいたし、自分自身で妻や子供たちを斬り殺し、自分自身も斬り死にする者たちもいた。スヴァトスラフ公は、町全部が燃えおちるまでそこにいて、6月15日のオシェリの町を占領した。ブルガール人たちは「大いなる町」やほかの町で、彼らの町オシェリが占領されたと聞くと、おおいなる悲しみにくれ、全員が自らの公たちとともに集まった。馬で来た者もいれば、徒歩で来た者もいたが、岸边に到着した。スヴァトスラフは、ブルガール人たちが集まってイサドゥイで自分を待っていると聞くと、自らの軍勢に甲冑を身につけ、軍旗を掲げるように命じ、軍勢を平底船と船に乗船させ、部隊ごとに太鼓をたたき、ラッパや笛を吹き鳴らさせて、自らは彼らのあとにつづいた。ブルガール人たちは岸づたいに歩き、ある者は父、ある者は息子と娘、ある者は兄弟、姉妹、従兄弟たちなど、自分の見知った者を見つけた。彼らは目で合図をしはじめた。そして、彼らの心臓はうめき声をあげ、自らの目を閉じた。彼らが町に到着すると、ウラジーミルでは大いなる喜びがあった。ユーレイ公は自分の兄と軍勢全員のために3日間にわたって大いなる宴を催した。スヴァトスラフ公は自らの弟に金、銀、さまざまな着衣、馬、武器、ピロード、高価な絹の織物、白布を贈った。同様に兵士たちにも手柄に応じて大いなる贈り物をした。スヴァトスラフは大いなる敬意を受けてユーリエフの町に向けて出立した。⁶²⁾

こうして、ヴォルガ・ブルガール族に対する遠征は大成功に終わった。年代記はつづけてヴォルガ・ブルガール人から和議が申し込まれ、ユーレイ公はこれを再三にわたって拒絶したことが記されている。

その冬、ブルガール人はユーレイ公に使者を遣わして平和を求めて懇請した。王は彼らの願いを聞きいれず、使節を返した。公は自ら先頭に立ってブルガール攻撃の準備をはじめ、ロストフのヴァシルコ・コンスタンティノヴィチに使節を遣わし、ゴロデツにおもむくことを

62 ПСРЛ.Т.7. С.126-128.

命じ、王自身もまたおもむくことにした。公がオムタにあったとき、ボルガール人から2回目の使節が彼のもとにきた。懇請と嘆願をもって和議を乞うた。しかし、公は懇請を無視し、彼らを自分のもとから立ち去らせた。彼は軍隊とともにゴロデツに到着し、ヴァシルコも彼のもとにきた。ブルガール人の使節たちは帰着すると、自らの公たちに、ユーレイ公がゴロデツに駐留しており、自らの兄弟たちを待っていること、講和に応じようとしないうこと、自分たちのもとにもう一度兵を送ろうとしていることを告げ知らせた。ブルガール人たちはひどく恐れ、ついに3回目の使節をゴロデツにいるユーレイ公に遣わし、大いに懇願するとともに、多くの貢物を献じて叩頭した。そこで公は彼らの願いを聞きいれて贈り物を納め、従来の講和の条件どおり、彼の父、フセヴォロドのときと同じように、また祖父、ユーレイ・ウラジーミロヴィチのときと同じように処理した。こうして、彼らは自らの部下を随行させてブルガールの公たちに誓いを立てさせ、彼らの土地を彼らの掟にしたがって治めさせた。⁽⁶³⁾

かくして、ヴォルガ川は上流域から中流域にかけて、ルーシ諸公が手中に収めたかのように見えたが、ブルガール人が1220年のこの段階でほとんど戦意を喪失しているように見えるのが気になるところだ。『ヴォスクレセンスカヤ年代記』はあくまでルーシの立場から書かれた年代記なので、ブルガール人に対して冷たい書きかたをしているのかもしれない。あるいは、このころ15万からなるモンゴルの大軍がイスラーム教国であるホラズムを倒し、マー・ワラー・アンナフルをはじめとする中央アジアを制圧していることをあわせて考えると、同じくイスラーム教国であるヴォルガ・ブルガール族は、東方からとてつもない強力な軍勢が襲いかかってこようとしていることを知り、ルーシとの妥協を求めたとも考えられる。

いずれにせよ、ヴォルガがロシア人（東スラヴ人）の川になりかけたところで、モンゴルがやってきて、状況は一変する。

5. その後のヴォルガ

以上、ヴォルガがロシア史の舞台となる以前の時代にさかのぼり、ハザール、ヴォルガ・ブルガール、ルーシの視点からヴォルガを見てきたが、紙幅がすでに尽きているようだ。これからヴォルガがたどる歴史をかたんにスケッチして本稿を締めたい。

これ以降の時代、大きな要因となるのは、すでに述べたとおりモンゴルである。モンゴル人が最初にロシアに姿をあらわしたのは、1223年のことだ。ルーシ西南部の諸公とポーロヴェツ人は、この謎の強敵とカルカ河畔で戦ったが、完敗を喫した。ルーシ諸公は縛り上げられて板のしたに横臥させられ、モンゴル人たちはその板のうえで酒盛りをし、ルーシ諸公を窒息死させた。モンゴル軍は草原への帰路、ヴォルガ・ブルガール族にも攻撃をしかけたが、ブルガール族は奮戦してこの攻撃を退けている。1232年にも、モンゴル軍はヴォルガ・ブルガール人にたいして攻撃をしかけたが、ヴォルガ・ブルガール人はふたたびこれをしのいでいる。

しかしながら、1234年（ないしは翌年）のクリルタイ（モンゴル人の大集会）で、チンギス・ハーンの孫であるバトゥを最高司令官とする15万からなる西方遠征軍が組織され、1236

63 ПСРЛ.Т.7. С.126-128.

年春から翌年秋にかけてヴォルガ・ブルガール人を攻めて屈服させた。モンゴル軍はさらに1237年初冬から、リャザンを皮切りにコロムナ、モスクワ、ウラジーミル、ロストフ、スタロドゥプ、ゴロデツ、コストロマ、ペレヤスラヴリ・ザレスキイ、トヴェーリ、トルジョクなどヴォルガ上流域の諸都市をつぎつぎに落とした。バトゥはヴォルガ下流域に居を定め、首都サライを建設した。⁶⁴

前述したように、下流域（ハザール、ポーロヴェツ）、中流域（ヴォルガ・ブルガール）、上流域（ルーシ）でことなる歴史をもったヴォルガは、皮肉にもすべての征服者となったモンゴル勢力によって統合されたのだった。

このあたりから、ヴォルガが一体性を獲得して、新しい時代がはじまったように思われる。ヴォルガという器のなかに民族グループが配置されて対抗する時代が終わり、ヴォルガ全体がもっと大きな器に飲みこまれ、ヴォルガを包摂する全体の一部として機能しはじめる。ヴォルガはまずキプチャク・ハーン国の川となり、ルーシがモンゴル・タタールのくびきを脱する過程で、「ロシアの川」となっていったという図式を描くことができる。

キプチャク・ハーン国はモンゴルの伝統にならい、宗教的には寛容でルーシにたいしてもキリスト教を保護したが、14世紀初頭にウズベク・ハーンのもとでイスラーム教に改宗した。ヴォルガ上流域であるロシアのキリスト教徒と下流域に位置するキプチャク・ハーン国との交渉（14世紀前半）は、かつて『ロシアの源流』⁶⁵ という本を書いたので、そちらに譲る。ヴォルガはロシアとジョチ・ウルス（キプチャク・ハーン国）を結ぶ重要な交通路だった。

14世紀には、ヴォルガを下ってノヴゴロドの河川賊ウシクイニキがヴォルガ・カマ流域、さらにはヴォルガ下流域まで進出して活動をおこなっている。ウシクイニキの主たる交易品は奴隷で、おもにイスラーム商人に売り払われた。⁶⁶

14世紀後半から、ヴォルガ上流域からモスクワ大公国が台頭してくる。一方、ジョチ・ウルスにはかげりが見えてくる。1360年代にキプチャク・ハーン国は内乱で分裂し、80年代には、中央アジアで大帝国を築きあげたチムールの侵入を許し、首都サライが破壊される。以後、キプチャク・ハーン国は統一されることはなく、カザン・ハーン国、アストラハン・ハーン国、クリミア・ハーン国が独立勢力となった。

15世紀半ば、サライを舞台にしてハーン位をめぐるジョチ・ウルスのなかで抗争が起こる。その敗者となったウルグ・ムハンマドが、1437年、ヴォルガ中流域にカザン・ハーン国を建国する。1466年には、カシム・ハーンがアストラハン・ハーン国を建てた。

カザン・ハーン国は脆弱で、つねに親モスクワ派と親クリミア派に分かれて抗争しており、115年間の歴史でハーンが19回も交代した。このカザン・ハーン国が1552年に、アストラハン・ハーン国がつづく1554年にイワン雷帝に征服された。⁶⁷ 事ここにおよんで、ヴォルガ川はついにロシアの川となったといえる。

モンゴルによる征服からイワン雷帝の占領にいたるまでの、このプロセスは詳細に追跡するに値するものであるが、また別の機会を期したい。

64 和田春樹編『世界歴史体系 ロシア史』山川出版社、1995年、143-150頁。

65 三浦清美『ロシアの源流』講談社メチエ叢書、2003年。

66 松木栄三『ロシア中世都市の政治世界』彩流社、2002年、280-289頁。

67 和田春樹編『世界歴史体系 ロシア史1』233-236頁；小松久男編『世界各国史 中央ユーラシア史』198頁、317-320頁。